

アセスメントプロセスにおける若手 PSW の困難さ

—— 研修の方向性の模索 ——

田 中 和 彦

要 旨

アセスメントはソーシャルワークの要とされ、質の高いアセスメントができてこそ価値に基づくソーシャルワーク実践が展開できるといえる。若手 PSW に対するソーシャルワーク実践力の向上を目的とした研修の方向性を探るために、アセスメントプロセスに着目し、若手 PSW のアセスメントの特徴について、面接事例を用いた内容分析をおこなった。その結果、若手 PSW のアセスメントプロセスにおける困難性として① PSW の枠組みでクライアントのスキルの査定を中心としていること、②変換ミス（クライアントの言葉についてクライアントの真意をくみ取れないまま、PSW の言葉で言い換えている）、③話題の回避（クライアントが話したいと思われることについて避けている）、④病理・欠損モデル（クライアントの問題点を抽出しようとする視点が強い）、⑤直線的理解（状態の原因探しに視点が偏重である）という特徴がみられた。さらに上記5点は相互に影響しあい、アセスメントの本来の目的であるクライアントの全人的理解を困難にしていることがわかった。研修の方向性として、エキスパートのアセスメントスキルの抽出を踏まえ、体験の積み重ねだけにとどまらないアセスメントスキル獲得のための研修の必要性と、そのためのソーシャルワークの「職人技」の言語化の必要性が示唆された。

キーワード：ソーシャルワーク、アセスメントプロセス、研修の方向性

I. はじめに

1997（平成9）年の精神保健福祉士法成立により、精神保健領域のソーシャルワーカーはスペシフィックなソーシャルワーク専門職として国家資格化され、その実践範囲を広げてきた。法成立の背景には、精神障害者の社会参加への支援、精神科病院の長期入院問題の解消、精神障害者

の地域生活支援などが緊急課題として挙げられていたが、国家資格化以降は、広く国民の精神的健康の保持・増進に寄与する専門職としての期待もされ、複雑化、多様化していくメンタルヘルス問題とその背景に潜む、社会問題への視点を向けた専門職として注目されている。

精神保健福祉士は、福祉系大学、養成施設での専門教育を受け、現場実習をおこない、国家試験の受験資格を得る。専門教育の中で、制度政策から、ソーシャルワーク技術に至るまで多岐にわたるソーシャルワーク専門職となりゆく教育を受ける。しかし専門職教育のみで質の高いソーシャルワーク実践がおこなえるとは言い難いのもソーシャルワーク専門職の特徴でもある。日々の実践の積み重ねと振り返り、適切なスーパービジョンが実践力を向上させていくといえる。

筆者らは、精神保健領域で活躍する若手ソーシャルワーカー（以下、若手PSW）が実践力を向上していくための研修プログラムの開発研究をおこなっている。しかし、「実践力の向上」がどのような能力、技術の向上にあたるのかはあいまいである。また、PSWに求められる実践力そのものについても定かではない。もっといえば、若手PSWがどのような現状にあるのかも定かではない。

これまでわが国では、ソーシャルワーカーの成長や成長プロセス、経験年数についての先行研究がある。大谷は、年齢とPSW経験年数による実践への影響について明らかにし、個別支援について6年、地域支援、集団支援については9年という経験年数によるターニングポイントの存在を指摘している（大谷2012）。また、20代のPSWはクライアントとの関係形成、実践行為が十分に展開できていないことも指摘している（大谷2012）。

保正は、PSWではないものの、同じソーシャルワークを基盤にもつMSW（医療ソーシャルワーカー）への質的調査から、新人期から中堅期を3段階としてストーリーラインを抽出して、実践力変容過程を明らかにした。葛藤から進む入職当初の実践から、研修やスーパービジョンへの参加、職能団体への参加による実践基礎力形成と限界との直面化、その過程を経て、自信獲得のアクションをおこない、自らのソーシャルワーク実践の実施へと成長していく段階としている（保正2011）。福田らは、精神保健福祉領域におけるソーシャルワーカーへの調査結果とBennerモデルとの照合から、新人ソーシャルワーカーの技能習得の発達過程を明らかにしている（福田ら2008、村田ら2008）。先行研究では、成長過程については明らかにされているものの、成長するための具体的実践スキルまでは明らかにされていない。

そこで筆者らは、若手PSWの成長における実践力の向上について、アセスメントプロセスに着目した。アセスメントは、ソーシャルワーク実践の鍵、礎石（Parker, & Bradley = 2008）、要（中村1994）、中心概念（太田1995）とされ、アセスメントが有効なら、介入が成功する可能性が高くなるといわれ（Milner & O'Byrne 2002）、「効果的援助はアセスメントにかかっている」（中村1994）というように、ソーシャルワーク実践の根幹をなすものといえる。適切なアセスメントは、効果的かつクライアントの希望に沿った実践の展開を可能とし、クライアントのエンパワメントにつながっていくのである。

若手PSWのアセスメントについて、筆者らは本研究の予備調査として、経験年数2～3年の

PSW を対象に、アセスメントにおける情報収集とその組み立て方法についての調査をおこなった。その結果、「若手 PSW はアセスメント項目に沿った情報収集はできるものの、得られた情報を生かして立体的に組み立てていくアセスメントは難しい」という一定の結果を得ることができた。アセスメントは全人的理解であり、単に項目ごとの情報収集に終始するのではなく、面接でのクライアントのやり取りの中から、言語的、非言語的なものも含めた情報をいかにキャッチし、クライアントの理解へと結び付けていくかという実践能力が求められる。しかし、そのポイントは「面接」や「かかわり」というソーシャルワークの極めて個別のかつ瞬間的な状態の中で現れるものであり、抽出し一般化することに困難を極めるいわば「職人技」の域である。しかしその「職人技」を伝承可能なものとし、若手 PSW に伝授していくことが専門職の成長プロセスとして不可欠であろう。

予備調査に基づき、若手 PSW のアセスメントプロセスで理解できない原因、立体的理解を阻害する要素は何かを明らかにするために、経験年数 2～3 年の PSW4 名に対してアセスメントを目的とした面接のロールプレイをおこない、若手 PSW がアセスメントを目的とした面接でのアセスメントプロセスでの失敗ポイントを分析した。そのことにより、若手 PSW の実践力向上のための研修プログラム開発の方向性を見出すこととした。

II. ソーシャルワーク実践におけるアセスメントとアセスメントプロセス

先にも述べたように、アセスメントはソーシャルワーク実践の中心に位置するプロセスである。アセスメントはクライアントの全人的理解を促進するためのプロセスとして位置づけられ、その理解は促進され続けるものであり、また、ソーシャルワークプロセスの中で繰り返しおこなわれるものである。しかし、アセスメントにおける解釈は論者によりさまざまであり、一定の定義として確立したものはみられないのが現状である。特に、1. 計画や介入までアセスメントをするか、2. 解釈を含むか、3. 価値志向とするか、4. クライアントとの協働作業とするか、5. ワーカー側の情報も情報収集の対象とするかという点については論者によって差異が見受けられる。以上について、研修の方向性の模索という本論の目的から、大谷が整理した「クライアントとワーカー、そして周囲の状況を、ワーカーとクライアント双方が理解するためになされる、情報収集と分析のプロセスであり、ワーカーは専門的価値に基づき知識を導出し、クライアントは固有の経験知に基づき、協働して目の前の現実を解釈し共有するプロセスである」を採用する（大谷 2013）。

アセスメントプロセスは、クライアントと出会ったその時から、クライアントに関する情報を収集し、理解を促進し、得られた理解をさらに深めるためにさらに情報を収集するという循環型のプロセスを経ていくのである。それは、ソーシャルワークの展開過程における「アセスメント」に限定した取り組みではなく、ソーシャルワークプロセスそのものの中で、常にクライアントの理解を促進させるための取り組みといえよう。さらには、それはソーシャルワーカー主導で

おこなわれる理解ではなく、クライアントとの協働的取り組みの中でおこなわれていく。本論ではアセスメントプロセスについても大谷が整理した「クライアントと状況の包括的理解を、ワーカーとクライアントが共有することを目指して行われる、ワーカーとクライアントそれぞれの行為と思考・認識が、同時並行で行われる情報収集と分析のプロセス」とする（大谷 2013）。

Ⅲ. 研究の方法

2012年3月～9月にかけて、経験年数2～3年目の所属の異なるPSW4名を調査協力者とした面接のロールプレイを実施した。対象となるPSWについては、経験年数3年目の精神科病院PSW、経験年数2年目の障害福祉サービス事業所PSW、経験年数2年目の障害福祉サービス事業所PSW、経験年数2年目の精神科病院PSWである。事例は架空の事例を用い、クライアント役については、15年以上のキャリアのあるベテランPSWに依頼し、詳細な事例の設定については、事前にクライアント役と協議した。面接の設定はある程度援助関係が形成され、情報が得られている3回目の面接としている。

4名のロールプレイとロールプレイ後におこなった面接の振り返りをすべて2台のHDDビデオカメラで撮影しICレコーダーで録音した。録音データを逐語化し、4名の研究者が内容分析をおこなった。研究チームは全員が10年以上のPSW実践経験をもち、現在は大学にて精神保健福祉士・社会福祉士の養成に携わっており、それぞれの実践現場や経験年数は異なる。分析の視点として①クライアント理解を促進しない質問、②クライアントのやり取りで共有できていない、食い違っていてしまっている部分、③自分なら何をどのように問い理解するかという3項目をあらかじめ共有し、各々で分析をおこなった上で分析結果を持ち寄りさらにチームでの分析を試みた。前述のアセスメントおよびアセスメントプロセスを意識した上で、4名の研究者の視点から若手PSWのアセスメントプロセスにおいてアセスメントを困難にしているポイントを抽出した。なおこの作業は繰り返しおこない、データ分析における「確からしさ」の担保を図った。

表1 調査協力者の概要

	A	B	C	D
調査時年齢	25	24	24	24
PSW 経験年数	3年目	2年目	2年目	2年目
所属機関と年数	精神科病院3年	就労継続支援事業所2年	ケアホーム2年	精神科病院2年
最終学歴	学部	学部	学部	学部

IV. 倫理的配慮

ロールプレイは架空事例を用いた。調査協力者には研究の趣旨を口頭及び文書で説明し、録音・録画データの使用について了解を得た。その他は日本社会福祉学会研究倫理指針に従った。

V. 結果

分析の結果、若手 PSW のアセスメントプロセスにおける困難性について以下の 5 点を抽出した。それぞれの項目の分析結果は別表のとおりである。

1. PSW の枠組みでクライアントのスキルの査定を中心としている

若手 PSW のアセスメントプロセスは、PSW があらかじめ設定した枠組みの中で、クライアントの生活スキルの査定が中心となっていた。さらに生活スキルの査定についても「できないこと」「問題となっていること」の抽出に力点が置かれた面接展開となっていた。基本的なアセスメントシートに記載されているような項目を埋めるような質疑応答形式になってしまい、必然的に情報収集に重きを置き、クライアントの感情面への寄り添いが十分でない面接となっていた。また、面接の進行も PSW が主体となりすすめられ、そのことでクライアントとの協働体制が確立しにくくなっていた。

表 2

P: PSW, C: クライアント

概念名	1. PSW の枠組みでクライアントのスキルの査定する
定義	PSW の主導でアセスメントプロセスが展開され、生活スキルの査定に着目したアセスメント
ヴァリエーション	<p>P 「昨日はよく眠れましたか」 C 「いや、あまり眠れなくて」 P 「そうなんですか」 C 「ちょっと疲れ気味で」 P 「寝る時間とかも遅かったですか」 ⇒質問攻めで PSW 主導である</p> <p>C 「最近(好きな)クラシックも聞けなくて」 P 「そうなんですね、テレビを見ることに関しては大丈夫なんですか」 C 「テレビは大丈夫です」 P 「そうなんですね、眠りは夜中何度か目が覚めてしまったりとかありますか」 ⇒ PSW が聞きたいことを聞いている。</p> <p>P 「最近調子どうですか」 C 「だるいですね」 P 「イライラしたりとかっていうのはありますか」</p>

	C 「あー、ときどきあります」 P 「うん、どういうときですか」 C 「なんか、あの何してよいかわからなくなったとき」 P 「そういうときはどうやって対処しますか」 C 「んー、まあそのときは、まあ、ちょっと外に出て」 ⇒一問一答形式になってしまう
理論的メモ	クローズドクエスションの多用、面接の流れ自体がPSW主導でクライアントの言葉に寄り添えていない、アセスメントシートの項目を埋める意識が強い

2. 変換ミス

若手PSWのアセスメントプロセスではクライアントの言葉についてクライアントの真意をくみ取れないまま、PSWの言葉で言い換えていることがみられた。アセスメントプロセスにおいて、もちろんPSWの解釈が入ることは必要なことであるが、その解釈はPSWの価値、クライアントとの今迄のやり取りから得られたクライアント理解、経験知などを基盤におこなうものである。しかし、若手PSWの解釈は、クライアントの真意とはいいたいところでの変換となっており、そのことによりクライアントが戸惑い、アセスメントの共有が難しくなる。

表3

概念名	2. 変換ミス
定義	クライアントの言葉について、クライアントの真意をくみ取れないまま、PSWの言葉で言い換えている
ヴァリエーション	C 「やっぱり仕事もせないかんと思うんですけど」 P 「仕事、定職に就きたいということですね」 ⇒仕事をしなければならないというクライアントの思いを、「仕事をしたい」という願望に変換して受け取っている P 「自立したい、ということですが、Aさんにとって自立とはどのようなイメージですか」 C 「私も、もう35歳なので、そろそろちょっと親と離れて、本当結婚もしたいし、仕事も35歳なのでなくちゃいけないと思うんです。だから、そういうことが全然できていないので、そういうことができるようになりたいかなと思います」 P 「じゃ、今おっしゃった中で、親と離れてってことは一人暮らしをしてみたいなっていうことと、結婚もしたいなっていうことと、お仕事もしたいなっていうことなんですね」 ⇒親と離れて＝一人暮らしという変換ミス
理論的メモ	変換ミスはクライアントの戸惑いを生み、協働的関係の形成に影響する

3. 話題の回避

クライアントが本来、PSWに話したいと思われることについてPSWが意図的に避けていることがみられた。今回用いた事例で挙げれば、ストーカー行為のような反社会的行動、恋愛、性

行動等の話題など、PSW が扱いにくいと思う話題については、本来取り上げて共有すべき話題であっても、あえて避けるというようなことがアセスメントプロセスで起こっていた。

表 4

概念名	3. 話題の回避
定義	クライアントが話したいことと思っていることを扱うことができず避けてしまう
ヴァリエーション	<p>C 「(饒舌に) 前デイケアへ行っていたところのクリニックのところに、どなり込んだんですよ。それで本当はスタッフの女の人に会いたかったのに、会わせてくれなかったもんだから、院長に、ちょっと出せって言って、どなりに行っただけです。そうしたら警察がバババって来て、それで、ただ頼んだけじゃねえかとかって思ったんだけど、なんか連れていかれちゃって、そこでそこは出入り禁止ですよ。それからそっちのデイケア行けなくなっちゃって。」</p> <p>P 「それで今作業所に行かれてるんですか？」</p> <p>⇒クライアントが話したような感じであるが、ストーカー行為という反社会的行動を扱うことができずにいる。</p>
理論的メモ	反社会的行動、性的逸脱行動など PSW 自身が苦手とする事柄について PSW が扱うことができない

4. 病理・欠損モデル

これはアセスメントプロセス全般にいえる、PSW の視点としてみられた。基本的視点として、病理・欠損モデルに基づく視点でクライアントを理解しようとし、ストレングスが意識されていない傾向が強い。クライアントとの面接から、クライアントが現在抱えている問題を抽出し、その問題に対しての解決策を提案する、というような展開が面接場面でおこっている。そのような面接展開であれば必然的に、PSW 主導での質問、問題解決策の提案となっており、協働的な関係ではない。

表 5

概念名	4. 病理・欠損モデル
定義	クライアントの問題点を抽出しようとする視点が強い
ヴァリエーション	<p>P 「働けそう？今の状況で、どう思いますか」</p> <p>C 「うーん、なかなかね、作業所に行くのも朝起きられないので」</p> <p>⇒できないことに着目する視点</p> <p>P 「調子どうですか」「症状はどうですか」「よく眠れましたか」</p> <p>⇒医師の診察場面と変わらない質問</p> <p>C 「マック（筆者注：マクドナルド）で働いていて、最初の 1 年半くらいは続いたんですけど、結構忙しかったですね」</p> <p>P 「お昼とか繁忙期とかすごく忙しいと思うんですけど、それを急がされるというのが、そういうのが大変でつらくてやめた……」</p> <p>⇒1 年半続いたというよりも、1 年半しか続かないという理解</p>

理論的メモ	クライアントの問題を把握してそれに向けた解決策を講じようとする。面接の瞬間に現れるというよりも全体を通した立ち位置として随所にみられる。
-------	--

5. 直線的理解（状態の原因探しに視点が偏重である）

4. の「病理・欠損モデル」との関連であるが、病理・欠損モデルである以上、状態—原因という直線的因果律での把握を基本としている。環境、生活史、社会状況との関連など、複数要素が絡み合いながらクライアントの問題が発生しているという視点、クライアントとクライアントを取り巻く環境との相互作用への視点に欠け、現在の状態に対する原因探しが顕著におこなわれていた。

表 6

概念名	5. 直線的理解（状態の原因探しに視点が偏重である）
定義	状態の原因探しに偏重した視点
ヴァリエーション	<p>C 「僕も今まであんまりつきあった経験とかないんですよね。だから、どうやっていったらいいか分からなくて、結構その人には、好きですみたいな、そういうことをちょっとどう伝えて良いか分からなくて、なんか……。なんていうんですかね。いろいろ話はしたんですけど。」</p> <p>P 「やっぱり、なんですかね、人間関係って、やっぱりいろいろあると思うんですけど、やっぱり結婚っていうものとか、仕事ってなると、どうしてもそうやって人とかかわることって増えていくと思うんですけど、こう、今まででもいいじめに遭われていたりとか、ちょっと昔あったと思うんですけど。」</p> <p>⇒恋愛がうまくいかないことを唐突に過去のいじめ体験に原因をつなげる。</p>
理論的メモ	一つの原因に限定してしまい、複数の要因が相互に影響しあうという視点に乏しい、状態—原因の公式に無理に当てはめようとしてしまう

VI. 考察

若手 PSW のアセスメントプロセスの困難性については、結果に述べたように 5 つの特徴をみることができた。まず、「PSW の枠組みでの面接展開」である。若手 PSW のアセスメントプロセスは、基本的なアセスメント項目の沿った情報収集となっている。それは既存のアセスメントシートを念頭においた面接展開であり、そのことで、若手 PSW の設定した「面接のストーリー」の枠組みの中で展開するという、非常に狭い範囲での面接展開になっている。結果的に面接は PSW のペースに沿ったものとなり、クライアントの語りに即した面接ができていない。面接技法についても、PSW が設定した枠の中からはみ出ないように、あらかじめ選択肢を提示してしまっており、クローズドクエスションを主体とした面接になっている。もちろん客観的事実に関する情報収集を主体とする場合には、クローズドクエスションも有効な質問技法であるが、項目を網羅して事実確認に焦点を当てた面接は、それ自体がクライアントのペースに寄り添えていな

い面接となっており、若手 PSW が陥りやすい質疑応答のような面接となってしまう。

しかし、アセスメントシートが存在自体は否定されるものではない。アセスメントのための情報収集の方向性として、または必要な情報を漏れなく収集していくという意味ではツールとして有効に活用すべきである。気をつけなければならないことはアセスメントシートにとらわれてしまい、その項目のみのアセスメントになってしまうことである。アセスメントプロセスはクライアントとの協働の関係から成り立つという視点から考えれば、項目にとらわれたアセスメントは協働の関係の形成に影響を与えるであろう。

次に「変換ミス」についての考察である。前述の「PSW の枠組みによる面接」の結果、PSW の想定する決めつけへあてはめようとする思考が、クライアントの言葉の真意をくみ取れず、PSW の主観的な理解となる変換ミスを引き起こすと考えられる。例えば、面接場面でクライアントが「私ももう 35 歳なので、そろそろちょっと親と離れて、本当結婚もしたいし、仕事も 35 歳になったのでなくちゃいけないと思うんです」と話す場面がある。それに対して PSW は「親と離れてということは一人暮らしをしてみたいということと、結婚もしたいなということと、お仕事もしたいなということなんですね」と返している。この場面を考察するとクライアントは「親と離れて一人暮らしをする」というよりは、「もう 35 歳にもなったので、親に頼ってられない、結婚も仕事もしなければならない」という、どちらかというと焦燥感に駆られた言葉として受け取れる。しかし若手 PSW は「親と離れる＝一人暮らしをしたい」「仕事も 35 歳になったのでなくちゃいけない＝仕事をしたい」というようにクライアントの真意に近づくことができずに PSW の解釈がなされているといえる。アセスメントプロセスが仮説の検証であるとすれば、仮説の検証をするという柔軟な姿勢ではなく、自らが設定した枠組みで理解しようとし、結果としてクライアントの真意をくみ取ることが困難になっているといえる。

これは面接技術でいえばクライアントの言葉をソーシャルワーカーの解釈を交えてクライアントに返す「言い換え」の技法であろう。言い換えの技法は、綿密なアセスメントに基づく PSW の解釈があってこそその技法であり、安易な言い換えは好ましくないことも分かる。言い換えの技法は、言い換えた後のクライアントの反応にも留意しなければならない。若手 PSW の「変換ミス」は起こりうるが、PSW の言葉にクライアントがどのような反応をしているのかを観察し、そこからクライアントの意に沿った解釈をしているのかどうかということを理解しなければならないだろう。

次に「話題の回避」への考察である。若手 PSW は専門職の価値というよりも、PSW 自身の価値観や道徳観を揺さぶるような事柄について反応してしまい、その結果、その事柄自体を面接で扱うことができずに流してしまうということがあった。事例では「通っていたデイケアのスタッフに恋愛感情を抱く」「スタッフにストーカー行為をしてしまい、医療機関での治療を中止させられる」というエピソードが語られる。そのエピソードについて、クライアントはどちらかというところ「武勇伝」のような語り口調と表情であり、そこは研究チームの振り返りでもクライアントの理解を促進させるためのポイントとしたのだが、若手 PSW はその語りをそれ以上取り上

げることができず、次の話題へと移っていった。ロールプレイ後のフィードバックにおいても、反社会的・反道徳的な行為や、性や恋愛に関することということは、「どう扱ってよいかわからない」という思いから面接場面で取り上げず、クライアントへの理解が深まるポイントを逃してしまうことがみられた。

これにはいくつかの背景が考えられる。ひとつはPSWのもつ援助観、障害者観、個人的道徳観の影響である。PSWに限らずソーシャルワークは、その専門職価値のもと「自分自身」を使っておこなう援助活動である。そこには必ず援助者である自分への接近が必要であり、それが自己覚知の重要性として認識されている。若手PSWはその経験年数の関係もあり、十分な自己覚知に至っていない。またそのような機会も実践現場で得られにくいという現状が関係しているといえる。

さらには、PSWが一人の生活者として経験や見聞きしていないことなど、自分自身の生活体験との関連での理解のしづらさである。PSW実践の質と経験年数は相関関係にある（大谷2012）というように、ある程度のPSWの人生経験はクライアント理解に対する視野が広がるともいえる。

次に、クライアントの核心に迫ること自体、若手PSWにとって不安が高く、「クライアントを傷つけてしまうのではないか」「信頼関係が損なわれるのではないか」というような思いから、クライアントからの評価を気にしすぎるあまり、聞けないという現状があることである。これは、PSW自身の自己評価、専門職としての自己評価との関連もあり、そのことがクライアントのアセスメントに影響することが示唆された。

最後に、そもそも重要と認識していないということである。アセスメントプロセスでのその情報の重要性についての認識は、クライアント理解とソーシャルワークの価値という観点から考えるものの、若手がそこにひっかかっている場合は、避ける以前の問題であろう。

若手PSWの視点についても考察したい。今回のロールプレイで特徴的であったことは、若手PSWは病理・欠損モデルでの視点が強く、ストレングスを意識した面接展開が困難であるということが分かった。アセスメント自体の目的がクライアントの全人的理解ではなく、クライアントの問題点の抽出という意識が強く出ていることが特徴ともいえる。面接場面を例に挙げるとクライアントが就労経験を話す場面で「マック（筆者注：マクドナルド）で働いていて、最初の1年半くらいは続いたんですけど、結構忙しかったですね」という話に対して若手PSWは「お昼とか繁忙期とかすごく忙しいと思うんですけど、それを急がされるというのか、そういうのが大変でつらくてやめた……」と返している。先に述べた変換ミスとも関連するが、クライアントが1年半の就労が続いたというプラス面でなく1年半しか続かなかったという、できなかった部分に焦点を当てていることがうかがえる。これは一例ではあるものの、視点の偏りはアセスメント全体に大きな影響を及ぼすと考えられる。

精神保健福祉士養成教育では、ソーシャルワーカーのモデル（物事のとらえ方）については、生活モデルを基盤にしつつストレングスを見出す視点を強調している。しかし、若手PSWは病

理・欠損モデルに依拠した視点が強いということにどのような背景があるのだろうか。机上の学習や演習教育、期間の定めのある短期間の実習が中心となる養成教育ではストレングスモデルの獲得に限界があるということが一つの背景として考えられる。また、精神保健領域におけるソーシャルワークの系譜は、我が国においては特に、精神科医療と切っても切れない関係にある。医療の影響を大きく受けながら、医療現場で発展をしてきたことを考えたときに、クライアントを「病者」「患者」ととらえる視点は現在においても影響が大きい。若手 PSW もその中で病理・欠損モデルの視点を実践の中で身に着けたとも考えられる。さらには、病理・欠損モデルはある意味シンプルな理解が可能となるモデルであり、次の「状態－原因」という直線的理解とも関連するが、その「わかりやすさ」が若手 PSW の陥りやすい部分ともいえる。

最後に挙げられる点として、「状態－原因」という直線的理解である。クライアントの状態を理解するときに、その直接的な原因を探そうという視点が若手 PSW の中にあり、状態の結果を生んでいる原因を探すという直線的な理解にとどまってしまうという、前述の病理・欠損モデルの視点から大きな影響を受けた理解となっていることが分かった。面接場面の例を挙げるとクライアントが不安を語るときに、「緊張が続いてそれがだんだんイライラになり、不安になり」という話をする場面があるが、それについて「緊張－不安－イライラ」というように直線的に理解をしてしまい、それがどのような不安なのか、どのようなときに不安になるのか、というような不安の構造についてはクライアントに聞いていない。また、クライアントが「恋愛がうまくいかない」と語る場面があるのだが、その問題について「過去にいいの体験があったからですか」というように飛躍的な結びつけをしてしまい、クライアントを戸惑わせることもみられた。このように状態や問題となっている部分の原因追求に力点を置くあまりに直線的な理解をしてしまう傾向があり、その背景には病理・欠損モデルの視点の存在が考えられる。

最後に、5つの困難性の関係についても考察しておきたい。今回示した5つの困難性にはそれぞれ相互に関係し影響しあうという点が特徴的である。PSW の主導的な面接であるが故に、クライアントとの共有ができておらず変換ミスを起こしがちであり、PSW が苦手とする分野の話題を回避しやすい。背景には、病理・欠損モデルの視点の強さがみられ、クライアントの問題の原因を探り、問題解決を目指していくという援助関係を結びがちといえるだろう。

VII. おわりに －研修の方向性の模索－

ソーシャルワークアセスメントはクライアントの全人的理解を目的に、書類上にある情報のみならず、クライアントとのかかわりを通して、クライアントを立体的に理解していく営みである。それは、単に支援計画作成やケアマネジメントのためではなく、クライアントとともに歩む協働の実践者としてのクライアントへの接近に他ならない。その意味ではクライアントの生きる過程そのものへの接近がソーシャルワーク実践には求められるのである。本研究で得られた知見は、若手 PSW の実践の困難性の一端を明らかにしたといえる。今後は PSW に必要なアセスメ

ントスキルを明らかにし、元来職人技として存在していたアセスメントプロセスの言語化を試みていく必要があるだろう。アセスメントプロセスにおいて「何が必要なのか」というソーシャルワーカーのスキルについては、経験年数を重ねたエキスパートのアセスメントプロセスのスキルなどをさらに検証していく必要がある。若手 PSW が単に実践経験の積み重ねから時間をかけて職人技を体得していくプロセスのみならず、若手 PSW を対象とした研修やスーパービジョンを通してスピーディに体系的に技術を獲得していくことが必要である。本論では若手 PSW の実践力をあげていくための方向性を明確にすることができたといえる。

課題を述べたい。今回は4例の面接事例の内容分析であり、偏った事例の検討である可能性も捨てきれず、普遍化という点ではさらに事例を積み重ねていくことが求められる。また、逐語記録による言語的データを中心に扱い、録画画像によるノンバーバルコミュニケーションの分析には着手していない。ソーシャルワーク面接というからには、言語・非言語の分析と双方の関係についての分析が求められる。若手 PSW の困難性を多側面から検討し、専門職の価値に基づく実践としてどのように伝えていくかを今後の研究課題としたい。

謝辞

面接ロールプレイに協力してくださった4名の若手 PSW、クライアント役を引き受けてくださったベテラン PSW に心より感謝します。

文献

- ・福田俊子, 村田明子, 吉川公章, 須藤八千代 (2008) 「精神保健福祉領域におけるソーシャルワーカーの技能習得に関する発達段階モデル第1報」『聖隷クリストファー大学社会福祉学部紀要』NO. 7, 106-118
- ・保正友子 (2011) 「医療ソーシャルワーカーの実践能力変容過程－新人期から中堅期に至る3段階－」『社会福祉学』52 (1), 97-107
- ・Milner, Judith & O'Byrne, Patrick (2002) *Assessment in social work, 2nd Edition*, Palgrave Macmillan Press Ltd.
- ・Milner, Judith & O'Byrne, Patrick (2009) *Assessment in social work, 3rd Edition*, Palgrave Macmillan Press Ltd.
- ・村田明子, 福田俊子, 吉川公章, 須藤八千代 (2008) 「精神保健福祉領域におけるソーシャルワーカーの技能習得に関する発達段階モデル第2報」『聖隷クリストファー大学社会福祉学部紀要』NO. 7, 120-132
- ・中村佐織 (1994) 「ソーシャルワーク援助におけるアセスメントと記録方法の模索」『ソーシャルワーク研究』20 (1), 4-9.
- ・太田義弘 (1995) 「ソーシャル・ワークにおけるアセスメントーその意義と方法ー」『ソーシャルワーク研究』20 (4), 260-266.
- ・大谷京子 (2012) 『ソーシャルワーク関係 ソーシャルワーカーと精神障害当事者』相川書房
- ・大谷京子 (2013) 「ソーシャルワークにおけるアセスメントー研修プログラム開発の枠組みー」『日本福祉大学社会福祉論集』第129号
- ・Parker, Jonathan & Bradley, Greta (2003) *Social Work Practice: Assessment, Planning, Intervention and Review*, Learning Matters. (=2008. 岩崎浩三・高橋利一監訳『進化するソーシャル

ワーク 事例で学ぶアセスメント・プランニング・介入・再検討』筒井書房)

- ・須藤八千代，福田俊子，村田明子，吉川公章（2009）「ソーシャルワーカーの成長と発達－「精神保健福祉領域における技能習得に関する発達段階モデル第3報」－」『社会福祉研究』No. 11，23-31
- ・渡部律子（2007）『気づきの事例検討会－スーパーバイザーがいなくても実践力は高められる』中央法規出版
- ・渡部律子（2011）『高齢者援助における相談面接の理論と実際 第2版』医歯薬出版
- ・吉川公章，福田俊子，村田明子，須藤八千代（2006）「ソーシャルワーカーの成長に関する研究の方向性と課題」『聖隷クリストファー大学社会福祉学部紀要』NO. 5, 1-15
- ・吉川公章，福田俊子，村田明子，須藤八千代（2007）「技能習得に関するベナーモデルのソーシャルワーカーへの適用」『聖隷クリストファー大学社会福祉学部紀要』NO. 6，68-80